

日本福祉大学 2020 年度論文掲載料補助 報告書

論文著者 所属・職 : 看護学部・准教授
 氏名 : 古澤 亜矢子
 論文題名 : Parent-Child Interaction Therapy for Japanese Working Mother and Child With Behavioral Problems: A Single Case Study

単著・共著の区別	共同執筆（筆頭執筆者）
掲載雑誌名	Clinical Case Studies
掲載雑誌 IF (インパクトファクター)	1.06
掲載ページ	270-281
掲載雑誌 URL	journal.sagepub.com/home/ccs
発行年月日	2020 年 8 月
雑誌出版社	SAGE
論文抄読	<p>1. 概要</p> <p>親子相互作用療法 (PCIT) は、著しい行動上の問題を抱える幼児を持つ家族のために開発された子育て介入法である。このケーススタディでは、欧米で開発された PCIT を、行動上の問題を抱える 5 歳の日本人男児とその母親に詳細に使用した結果を報告する。</p> <p>2. 方法</p> <p>ケーススタディ</p> <p>3. 結果</p> <p>母親はコーチセッションの初期段階で PCIT のスキルを習得することに成功し、子どもの問題行動の改善につながった。しかし、後半では、母親は疲れやストレスで治療に集中できず、PCIT の実施を難しくした。これは主に、母親がフルタイムのワーキングマザーであり、仕事、家事、育児で非常に忙しく、また、夫の助けも得られなかったためである。その事は、母親の感情の揺れに大きく影響した。このようなケースは、現在の日本社会ではよく見られる。</p> <p>日本の母親は、たとえフルタイムで働いていても、家族の面倒を見ることに全責任を負う傾向がある。このような文化モデルは、もちろん、コミュニティ内のすべての個人に当てはまるわけではないが、日本の場合、長い島国の歴史を背景に、移民を鋭く制限し、アメリカや西ヨーロッパのような人種や民族の多様性がないことから、他の国よ</p>

りも同質性が高いかもしれない。

4. 結論

本事例は、行動上の問題を抱える子どもを持つ日本の家族に対する欧米発の PCIT の潜在的な有効性を支持するとともに、特に日本のワーキングマザーの場合、養育者のセッションルーム外での気分転換、感情調整をどのように実施しているかを注意深く評価し、対処する必要がある。